

## 木下勝俊の「九州の道の記」と「伊勢物語」

稲田 利徳

一  
豊臣秀吉は朝鮮征伐をめざし、文祿元年（一五九二）三月、十六万の日本の兵力を九軍に編成して朝鮮に渡航させた。いわゆる文祿の役である。

当時、二十四歳の青年武将で、龍野城主でもあった木下勝俊（長嘯子）は、同年正月十五日頃に京を出発、播磨に二十日ほど滞在、その後、備後の鞆の浦を訪れ、さらに厳島に参詣して旧知を尋ね、下関の赤間が関、博多・太宰府を巡回した後、筑紫の歌枕などを眺めながら、四月初旬に肥前名護屋に到着している。この期間の旅程を綴ったのが、ここでとりあげる「九州の道の記」である。

「九州の道の記」には「隣の国安芸の厳島に詣でて、一年筑紫に下りしとき、宿りける坊の主を尋ね侍りければ」とみえるが、これは、天正十五年（一五八七）、秀吉が九州征伐の途についたとき、勝俊も従軍したことを指示しているであろう。このときの彼の紀行文は現存しないが、「芸藩通志」（巻二十七）には、この年、安芸の厳島の水精寺で、秀吉が催行した歌会「豊臣関白参詣興行和歌三十六首」に勝俊の歌がみえ、九州下向の足跡が確認できる。その時、勝俊は十九歳であったので、それから五年後に、再び九州に従軍下向したことになる。

ドナルド・キーン氏も「秀吉の諸戦役の間に書かれた、おそらく最

も文学的な日記は、木下長嘯子の『九州の道の記』であろう」と評価しているように、この紀行文は、妻子や親友を故郷に残したまま、死闘の境界に向わねばならなくなった、一人の青年武将の悲哀と鬱屈した思いが静かに吐露された佳作である。

そして、そういった郷愁の心情表現を背後から支えているのは、古歌や物語の摂取であるが、とりわけ「伊勢物語」の受容が顕著である。中世の紀行文で関東へ旅立つときは、「伊勢物語」の東下りの章段が摂取されるのが、常套的手法であるが、「九州の道の記」は西国下向であるにもかかわらず、頻繁に「伊勢物語」を摂取している点が、まず特異であるだけでなく、それがこの紀行文を底流する抒情と緊密に作用仕合っているように思われる。

ここではその点を念頭にしながら、「九州の道の記」における「伊勢物語」の享受の痕跡を辿りながら、それがこの作品にどのような意味を付与しているかを探ってみたい。

なお、「九州の道の記」に焦点を絞った論考は稀少だが、嶋中道則氏「細川幽斎と青年時代の長嘯子―両者の九州紀行文をめぐって―」で、天正十五年の幽斎の「九州道の記」と長嘯子の「九州の道の記」とを比較対照して論じた際、「九州の道の記」に「伊勢物語」の影響が著しいとして、六箇所ほど指摘してある。そこではその結果を、長嘯子の作品が「物語的」性格―擬王朝風の旅の情趣を述べるのに重きを置いた作品であることの証拠としている。

兩紀行文を對比しての嶋中氏のこの見解は妥当なものかとも思うが、ここでは若干視点を変え、「九州の道の記」における「伊勢物語」享受の意図を、作品を底流する抒情性と絡めて、具体的に言及してゆきたい。

## 二

木下勝俊は、当時の公家や武士がそうであったように、若い頃から「伊勢物語」（以下・「勢語」と略称することがある）に親炙していたであろう。

彼には青年時代に東国に下向した紀行文「はじめてあづまにいける道の記」（『拳白集』卷八）や天正十八年（一五九〇）の秀吉の小田原征伐に従軍した時の「あづまのみちの記」という東国下向の作品がある。

前者の紀行文では、宇津の山を徒歩で越えながら、

むかしおもふうつのやまべのつたかへで人こそあらねしげるころ  
かな

と「勢語」（第九段）の東下りを念頭に詠歌し、さらには、角田河が近いことを聞き、わざわざ見物に出かけ、

今も舟にのれといふは、このわたし守のみせにやあらん

これぞこの東路とをくおもひこし角田がはらの渡なりける

とはでたゞそれと頼まむ角田川むれる鳥はあらぬなもこそ

と、第九段の都鳥の場面を想起して二首を詠出している。

また、後者の「あづまのみちの記」でも、宇津の山で、

なりひら朝臣、このつたの細道分入し、たびのあはれもおもひしら  
れて

うつの山こえし人こそむかしなれわくるはおなじつたの細道  
と詠み、また、旅の途中、目についた河の名を人に尋ねると「すみだ

河」だと答えたので、

さてはなりひらの、みやこどりにこと、ひし所にやといひければ、  
翁それにはあらず、こ、はするがのくにいほはらや、すみだ河とよ  
みしとかたりければ、

みやこどりのみやこ、にもすみだ河こと、ひかはせ浪のまにくと、  
駿河の国の「すみだ河」を、「勢語」のそれと錯覚した話も記し  
とどめている。

この二つの紀行文には、このように「伊勢物語」（第九段）の東下り、  
それも宇津の山と角田河の場面が詠歌の契機になってはいるが、極め  
て狭い範囲の、それも常套的な享受になっている。

もつとも、勝俊が「勢語」のうち、最も人口に膾炙されていた東下  
りの章段だけを熟知していたわけではなく、この歌物語全体を深く愛  
読していたことは、彼の他の随筆類にも、その一端が垣間見できる。

例えば、「伊勢物語」とか在原業平朝臣と明示したものを少し列挙  
すれば、次の、

伊勢物語に、山科の禪師のみこ、嶋このみたまふきみなればとて、  
なにかしの大將たてまつられし、紀国の千里ノ浜のためしもおもひ  
いでらる。在原なりけるおのこ、あかねども岩にぞかふるとよみし

時のことによ。（石枕記）

は、「勢語」第七十八段の、

あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ

の歌と章段を、また、「ぬすみて木をうふることは」では、密かに桜  
を盗んで自分の庭に植えた行為を「業平の朝臣女をぬすみてにげし、  
あきた河のほとりまでおもひやらる」と第六段と重ねて苦笑し、小塩

山の麓の隠棲生活を記した「山家記」でも、「このわたりは、二条の  
後のまだ御息所と申ける時、氏神とてまうで給ひし御ともに、業平朝  
臣さぶらひて、人しれぬむかしの夢を、神代の事とかすめけん、春日

の宮もいとけちかき所なり」と、

大原や小塩の山もけふこそは神世のことも思ひ出づらぬ  
の第七十六段を想起して記している。

このほか「伊勢物語」とか在原業平といったことを明示していなく  
ても、

しかはあれど、千代もといのるためしもあれば、なをいたましから  
んこと、人の子のほいなるべし（祖母の思ひにはべりける時のこと  
葉）

わがなみださらぬわかれに袖ぬれしこそぞのけふにもおとりやはする  
（うなる松）

玄旨法印は、ことし八十ぢのよはひに三年ばかりやたりたまはざり  
けん、（中略）、さらぬわかれになしはてぬるなんかなしうあたらし  
くあはれなるわざなりける（玄旨法印をいためることば）

などの記述は、「勢語」第八十四段の、母親が息子に贈った、  
老いぬればさらぬ別れのありといへばいよ／＼見まくほしき君かな  
と、これに答えた息子の返歌、

世の中にさらぬ別れのなくも哉千世もといのる人の子のため  
を撰取している。また、

ことづてよ今日別るともみよし野、たのむのかりやありやなしやを  
（正意法橋饒別）

武蔵野はぬす人あなり紫のいろはめづともはやかへりきね  
（正意法橋饒別）

我がなみだ袖のみなど、なりな、むむなしき舟もまたやうかぶと  
（後陽成院崩御をいたみて）

かへす衣の ゆめぢまで ゆるさぬ関の せきもりは たれあふさ  
かに すへつらむ……（うなる松）

などは、各々「勢語」の第十段・第十二段・第二十六段・第五段など  
を念頭にして詠歌したものである。

勝俊の、この種の「伊勢物語」の撰取は、他の随筆や和歌にも散見

されるが、それをここで列挙することは割愛する。

要するに勝俊の「勢語」享受は、別段、著名な東下りの章段に限定  
されたものではなく、物語全体にわたって親炙していたこと——この  
事実をまずは確認し、「九州の道の記」に焦点を絞ってゆきたい。

### 三

「九州の道の記」<sup>註</sup>（以下、「道の記」と略称することがある）に「伊勢  
物語」の影響の著しいことは、先にも少し触れたが、そのことは、い  
きなり冒頭部分に窺える。

「道の記」の冒頭は、天正末年に豊臣秀吉が「唐土」を征伐するに  
際し、作者自身も九州に従軍する旨を述べた後、京を出発するとき、  
ある人のもとから御衣に添えて、次の二首の和歌を贈られたことを記  
す。

玉鉾の道の山風寒からば形見がてらに着なんとぞ思ふ  
あまたには縫ひ重ねねど唐衣思ふ心は千重にぞありける

ところでこの二首の和歌は、ある人自身の詠出歌ではなく、前歌は「み  
ちのくににくだり侍りける人に、さうぞくおくとよみ侍りける」  
と詞書を有する「新古今集」<sup>註</sup>（離別・八五七）の、後歌は「橘公頼帥  
になりてまかりくだりける時、としさだが継母内侍のすけの、むまの  
はなむけし侍りけるに、さうぞくにそへてつかはしける」と詞書のあ  
る「拾遺集」<sup>註</sup>（別・三二七）の、各々紀貫之の和歌である。即ち、二  
首は向う所は陸奥と九州と相違するものの、旅立つ人に装束とともに  
和歌を贈った離別歌として同質性を有する。作者勝俊に御衣を贈った  
人は、現在の場面状況にマッチした古歌を選択し、それに自分の思い  
を託したわけである。

香の焚き込められた御衣と和歌を贈られたことに対して勝俊は、  
君ならで道の山風寒しとも誰かいとはん旅の空まで

心ざし深き色香の唐衣かへすがへすも形見とや見ん  
の二首を返歌にするとともに、「かかる情のありがたさよと、あるは  
涙のふるきわざまで思ひよせられ侍る」と感激に咽んでいる。

この傍線部の「あるは涙のふるきわざ」とは、すでに嶋中論文にも  
指摘があるように、

「勢語」(第十六段)の紀有常の詠歌、

秋や来る露やまがふと思ふまであるは涙の降るにぞ有りける  
に依拠しているとみなしてよい(勝俊は「ふる」に「降る」と「古る」  
を掛ける)。けれども、それは単に、相手の厚意に対して、随喜の涙  
を流しているという意味だけの引用、撰取に終っていないところが留  
意される。

この「勢語」第十六段は、紀有常が時勢に取り残されて零落、やが  
て四十年連れ添った妻も尼となって、家を出て行くことになるが、  
「今はと行くを、いとあはれと思ひけれど、貧しければ、するわざも  
なかりけり。思ひわびて」、親友にその思いを洩らしたところ、それ  
に同情した友人が「夜の物まで」贈ってきた。それに対し有常が、  
これやこのあまの羽衣うべしこそ君がみけしとたてまつりけれ  
と詠み、さらに「よろこびにたへで」、先に引用した和歌を詠じた  
という歌物語である。

この点に関して嶋中氏は次のような見解を述べている。

『伊勢物語』(十六段)の話をつまみ、その有常の気持ちによそえて、  
「おんぞ」を調達してもらった感謝の気持をのべたものといえるで  
あろう。それはまた、その衣類について「彼おんぞ、えならぬもの  
がたりのこ、ろを、筆のかぎりうつくしくかきて、とる手もくゆる  
ばかり匂ひたきしめられたり」と述べていることと相俟って、何が  
しか王朝風の物語めいた感じを与えるのである。

即ち、この「勢語」の引用は、衣類はもちろん、夜具まで贈ってくれ  
た親友への有常の感謝の念と、勝俊が旅立ちに対して御衣を贈ってく

れた人への感謝という構図で重なる。けれども、この「勢語」の享受  
は、それだけの単純なものに終わっていないのではなからうか。

「勢語」第十六段が訴えかけてくるものは、親友の温い思いやりも  
あるが、主旋律は、有常自身、我が身の零落のため、  
手を折りてあひ見し事をかぞふればとをといひつ、四つは経にけり  
と詠嘆したように、四十年連れ添った妻が、尼となって彼のもとを去っ  
てゆく、その離別の悲哀さである。

勝俊は「道の記」の冒頭で、従軍を命ぜられて、肉親達と離別しな  
ければならない苦痛や悲しさを、ストリートに表白してはいないが、  
この「勢語」第十六段の引用により、御衣を贈ってくれた人への感謝  
とともに、歌物語の主旋律ともいえるべき、別離の哀しみを暗示してい  
たのではなからうか。

「九州の道の記」は従軍紀行文ではあるが、そこには、征伐に向う  
敵に対する勇猛心や自身の戦意を鼓舞するような心情表白は微塵も記  
されていない。それどころか、作品全体に流露する感情は、京洛や故  
郷に残してきた肉親や親友を思慕する悲しみである。妻子持ちの学徒  
出陣にも似た悲痛さが、随所に吐露されている。

当時、すでに龍野城主であった勝俊は、その地に妻子を残していた  
ようである。京から九州へ下向の際、彼は播磨の国に二十日間も滞在、  
出発に当っては「親しかりける人」のもとへ、桜にさして、  
出でて行くあとなくさめよ桜花我こそ旅に思ひ立つとも

と惜別歌を贈っている。勝俊にとつて「故郷」とは、「道の記」末尾  
の長歌から判断しても、播磨国龍野を念頭においていたようであり、  
尾道では乗船して「おもしろき浦々に心を慰めて、少し故郷も忘れぬ  
べき心地して」と記したり、肥前名護屋に到着し、郭公の一声を聞き、  
郭公初音聞くにはなぐさまで出でし故郷なほぞ忘れぬ

と、故郷への思慕の情は終始、念頭を去らなかつたようだ。  
「道の記」における「勢語」享受で最も注目されるのは、備後の鞆

の浦で「万葉集」に詠歌された「むろの木」を探したが、見つけ出せず、「かく名ある木も跡かたなく、何事も昔に変わりゆくこそものごと悲しくは侍れ」と落胆した帰途、神島かみしまという所に立ち寄り、蹴鞠をした後の、次の月夜の場面である。

さて、月の山の端を澄みのほりてさやかなるに、故郷人もかくやながむらんと思ひ出でて帰りにけり。玉鉾の道も遙かならねば、いくばくもあらぬに來着きぬれど、内に入るべくも覚えで、宿の前なりける辻堂のこぼれかかりたる板敷の上に、夜ふくるまで、月やあらぬ春や昔と、独りごち居て侍りけり。

この「月やあらぬ春や昔」とは、著名な「勢語」第四段の、月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にしての引用であることはいままでもないが、ここも単に、月を見て昔を想起しただけの援用に終っていない。「道の記」の「宿の前なりける辻堂のこぼれかかりたる板敷の上に、夜ふくるまで……」の叙述は、「勢語」で、男が先の和歌を詠ずる「うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる」という場面状況と重なる。

この「勢語」受容は、「哀艶な恋の情趣と重ねあわせることによって、旅の感傷を表現しようとしている」ということではあるが、なお仔細に吟味すると、「道の記」に流露はらわしている、故郷の肉親達への思慕の情が絡まっていると思われる。そのことは、「故郷人もかくやながむらんと思ひ出でて」という、山の端に澄みのぼる月を眺める心情にも、さらに、先の引用に続く、

明くれば故郷へ文遣はず。親しかりける友達のもとにかくなむ、思ひきやおなじこの世にありながらまた帰る来ぬ別れせむとはと、現世にあつて、再び帰って来れないかもしれない別離に心の疼きを伝える和歌を友人に送っている文にも明瞭に窺うことができる。

「勢語」第四段は、「西の対に住む」恋しい人が、突然姿を隠して

しまったという、男女の愛が引き裂かれる物語である。勝俊が敢えて「勢語」のこの著名な章段を撰取したのは、恋愛情趣という雰囲気の醸成に中心があるのではなく、主人公の男が痛感した女との別離の悲哀を、故郷に残した親愛な人々との悲痛な別れという勝俊自身の感情と重ねる意図によるものだろう。

このように吟味してみると、「九州の道の記」における「伊勢物語」の撰取の様態は、紀行文に、王朝的な物語めいた雰囲気を醸成するためとか、哀艶な恋の情趣を重ねるといったことに主眼があつたのではなからうということが透視されてくる。ここで対象にされた第十六段と第四段に流露するものは、長年連れ添ってきた妻や恋しい女との別離の悲哀であつたが、作者勝俊は、その物語世界の悲痛な「別離」の場面を肉親たちを残して戦闘に参加せざるを得ない、自身のやりばのない別離の悲しみと重ね、その思いを増幅させることを企図したと思われる。

「道の記」には、他にも、「勢語」の撰取は散見されるが、名所歌枕への関心を示したものを除けば、多くはこの線上に即した受容がなされている。

#### 四

ひき続き、「九州の道の記」で、「伊勢物語」を念頭にした記述に触れてゆきたい。

先述したように、勝俊は、ある人から御衣を贈られて感激しながら京洛を出発したあと、須磨・明石を経て、播磨の国に滞在する。

さて須磨・明石の月をながめつつ、播磨国にしろよししてまかりて、廿日あまり留まりぬ。

この「しろよしして」は「勢語」第一段の「むかし、をとこ、うひかうぶりして、平城の京、春日の里にしろよしして、狩に往にけり」の

表現を借用しているとみなしてよい。古来、この「しるよしして」の解釈をめぐっては、「知行所（領有する地）があつて」とか「仲間と連れ立って」など、種々な見解が提出されているが、勝俊は現在、播磨の龍野城主であるので、「しるよしして」を領有する地があつての意で用いているのであろう。しかも、この土地に二十日間も滞在したのは、妻子をはじめとする昵懇な間柄の人々との惜別のためとも憶測される。

従つて、この「しるよしして」の撰取も「勢語」から表現だけを單純に借用し、術学的な叙述に仕立てたものではなからう。「勢語」の第一段は、奈良の春日の里に「しるよしして」狩に出かけ、そこに「いとなまめいたる女はらから」との出会いがなされたが、この物語の展開は、同時に、勝俊自身も都から播磨の国に下り、妻子など肉親との出会いのあつたことを言外に示唆する作用があつたのではなからうか。先にも触れたが、播磨を出発する際、彼は「そこに親しかりける人のもとへ、おもしろかりける桜にさして」、

出でて行くあとなくさめよ桜花我こそ旅に思ひ立つとも  
という歌を与えているが、この「親しかりける人」とは、臚化してはいるものの、歌の内容からみて、妻その人であつた可能性がある。その点で、ここでも「勢語」は、親しい人達との出会いと別離の場面に享受されているとみなされる。

さらに山陽道を西下して尾道に到着したところでも、次のような「勢語」の撰取がある。

おなじ国尾道といふ所より、舟に乗りておもしろき浦々に心を慰めて、少し故郷も忘れぬべき心地してなん下りけるに、春のものとして雨そそぎしけり。

この「春のものとして雨そそぎしけり」は、「勢語」第二段で、「まめ男」が西の京の女に「時はやよひのついでたち、雨そほふる」時に贈つた歌、起きもせず寝もせず夜をあかしては春の物としてながめ暮らしつ

に依拠している。

「勢語」第二段の「まめ男」は、女と情交したあと帰宅し、夜は恋の煩悶で眠れず、昼はそほ降る雨を眺めながら、永い一日を切なく暮らしている。この「勢語」の男の思ひは、そのまま旅にある勝俊の気持と共通する。尾道の情趣深い海辺の景観に、少し郷愁を忘れていた彼は、「春のものとして雨そそぎしけり」と「勢語」の雰囲気を取り込むことで、春雨を眺めながら、再び故郷への思ひを募らせたことを暗示している。

その証拠に、勝俊はこの後、無人島のごとき沖の小島に舟を寄せ、一晩夜をあかしているが、その気持を「たぐひなくもの心細う、浮き寝のあはれも身に知られて、まどろむとしもなく」と洩らし、夜もすがら苦洩り明かす春雨に浮き寝の袂なほしほるなりと詠ずる。この心境と態度も「勢語」第二段の「まめ男」のそれに通う。

さらに彼は波路を分け、旅の疲労を休めようと、童一人を連れ、とある島に上陸する。するとそこに、

昔いかなるものしわざにかありけん、五丈ばかりありける石の面に、

あはれなり雲路つらなる波の上知らぬ舟路を風にまかせて  
といふ古き歌をぞ書き付けける。また人も惑ひ来て、かかる所のあはれを身に知りけるよと、いと悲しうおしはかられぬ。

と、彼と同じ体験をした人が記した石面の古歌に出会い、今更のよう旅泊の悲哀を共通体験しているのである。

この古歌は、実は藤原良経の歌集「秋篠月清集」の「二百首」中の海路歌題歌五首のうちの一首である。勝俊は他の箇所でも、この海路五首の一首を引用しており、この場面には虚構が施されているかもしれない。が、それはともかく、この「五丈ばかりありける石の面」の形容も、「勢語」第八十七段で、男が津の国の蘆屋の里で、「布引の

瀧」を見物に出かけ、その瀧を「長さ二十丈、広さ五丈許なる石のおもて、白絹に岩をつ、めらんやうになむありける」を想起させる。

勝俊は、この岩の面に記された古歌を見て旅愁を共感した後、その浜に下り居て、手すさみながら、小さく美しき貝どもの多くあるを拾ひ持ちて、やうやうもとの舟に來けり。

と、貝殻を拾うという優しい行動をとって再び上船している。この「浜に下り居て」も「勢語」を意識しての記述ではなからうか。「下り居る」は別段、「勢語」独自の表現ではなく、他の作品にも散見される。けれども「勢語」に三回現われる「下り居る」は、いづれも、情趣深い対象に遭遇したとき、それを看過せず、わざわざ馬から下りて坐つて詠歌するという、「みやび」な行為とかかわつており、印象深い。とりわけ、第九段の東下りで、三河の国八橋で、「かきつばた」を見て、「澤のほとりの木の蔭に下りあて」、

から衣きつ、なれにしつましあればはるくきぬる旅をしぞ思ふ  
と、京に残した妻を思慕する歌を詠じた場面は、あまりにも著名である。

「道の記」のこの「下り居て」は状況から判断して、馬からではなく、路から浜辺に下りたのであろうが、彼がそこで、小さな美しい貝を拾つたのは、「みやび」な行為であると同時に、その貝をいとしい妻子への土産として持ち帰ろうとしたのではなからうか。そういった記述は、「道の記」にはなにも記されていないが、「勢語」の撰取がその行動の心の裡を暗示しているのである。

ここでは「しるよしして」「春のものとて」「下り居て」といった、ほんの断片的な「勢語」の表現の撰取を対象にしてみたが、それらは、単に表現のみの借用ではなく、いづれも、物語世界の場面や主人公の男の心情などを同時に取り込んでいること、それによって、「道の記」全体に横溢する郷愁の思いを増幅させる作用がなされているとみなされるのではなからうか。

## 五

「九州の道の記」における「伊勢物語」の享受が、すべてこれまで述べてきたような、故郷の肉親達への思慕の情と関連付けられたものばかりであるわけではない。

筑紫へ下向する道中に、「勢語」に現れた歌枕に出会えば、勝俊も当然、歌枕に対する関心を示している。例えば、次の「袖の溱」や「染川」などがそれである。

それよりほど近き博多といふ所に、四、五日ありけるうちに、「袖の溱」とことごとくいはれたるはいづくぞ、尋ね見ばや」と申しければ、主心ある人にて導べしけるに、主のいはく「今こそ潮のさし來て水も少し侍れ、常は無下にいふかひなく候ふものを」とぞ申しける。まことに唐土舟寄せつべき浦とも覚えず。

この博多にある「袖の溱」は、「勢語」第二十六段の、思ほえず袖にみなどのさわぐ哉もろこし舟の寄りし許にと関連を有する歌枕であろう。この歌の「袖に溱のさわぐ」とは、悲しみの涙が溢れるほど袖に溜まったさまを溱に見立てたもので、特定の地名ではない。「和漢三才図会」(筑前・博多)に「○袖ノ溱 在博多中一。昔此処有入海、唐舟出入。中古入于平戸、今入長崎、故唯有レ名耳。」とあるように、「袖の溱」は古くから博多にあった地名だが、それを「勢語」と関連付けて歌枕となしたか、博多が唐船の出入りする港ということなので、「勢語」と絡めて歌枕に付会したかの地名であろう。勿論、「勢語」の「袖に溱」は博多とは無関係で、「伊勢物語古意」が「袖の溱に転じて筑紫の一つの名所とするは甚しき事也」と批判する通りである。が、勝俊は「まことに唐土舟寄せつべき浦とも覚えず」と「勢語」と関連付けられた歌枕として認識している。

さらに彼は、太宰府に出かけ、その周辺の名所旧跡を見物した際、

業平の、色になるてふとよみし染川も、そのかたなく、水さへかれはてて、昔の跡といふばかりなり。

と「染川」にも目をとめてゐる。これも「勢語」第六十一段で、男が筑紫まで出かけた際に、女に贈つた。

染河をわたらむ人のいかでかは色になるてふことのなからんを想起してのものである。

「染川」は福岡県太宰府市にある、太宰府天満宮と観世音寺との間を、東から西に流れる川で、別名を逢初川・思川とされる歌枕である。「勢語」で、主人公の男が筑紫に下向する章段としては、第六十段の宇佐の使の段と、この第六十一段とがあるが、その点、勝俊も西国に下る際、「勢語」のこれらの章段を想起し、自身を「男」の心境と重ね合せていたかもしれない。その点でも「染川」の歌枕への関心は看過できない。

このように、袖の湊や染川を「勢語」と関連した歌枕として眺める勝俊は、そこで特徴的な受けとめ方をしている。「ことごとしくいはれた」袖の湊へ案内した人の、「常は無下にいふかひなく候」の言に同感したり、染川でも、水さえかれた川を見て、「昔の跡といふばかりなり」と慨嘆するのがそれである。この心情は、輶の浦で「むろの木」を見出せなかつたときの落胆ぶりを想起させる。

昔から語り伝えられた名木や名所旧蹟が、かたもなく荒廃している現実を眼前にし、そこに有為転変の世相を痛感するのは、後髪を引かれる思いで故郷を後にせねばならなかつた、彼の心細い心情そのものの反映でもある。

その無常の世相を、彼は安芸の国でも切実に実感している。

一年筑紫に下りしとき、宿りける坊の主を尋ね侍りければ、「一昨年身まかりぬ」と弟子なりける法師の語りける。今思へば、その頃七十ばかりになん見えつる。恨むべき齢ならねど、また帰り来ぬ道は、いと悲しうなん。逢ひ見て物語などせしほどは、六年にぞなり

ける。なにごとものはかなき夢とのみなりはてて、皆帰らぬ昔となりけり。かの坊の泉水心をつくし、草木など植を置きたり。

なき人の手づから植えし草木ゆゑ庭も籬もむつまじきかなとよみければ、皆人袖をなん濡らしける。

六年前に面談した人の死去を知らされたときに催した、傍線部のごとき、普遍的な寂滅相への実感も、戦闘を前にして、死を凝視する彼の心情とからめての受けとめかたである。また、亡き人の植えた草木から故人を偲ぶ歌を詠じたときの波線部は、「勢語」第九段で、男が「唐衣」や「都鳥」の歌を詠じたときの、「とよめりければ、皆人、乾飯のうへに涙おとしてほとびにけり」とか「とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり」を意識において記しているとみなしてよい。この「勢語」の場面も、遠く離れた妻を偲んでいるが、それは、「道の記」の、今は亡き人を偲ぶ思いと通ずるといえる。

勝俊はこの老人の死に無常を痛感したあと、それよりまた舟に乗りて下りけるに、朝霞深く立ち籠りて、わが友舟もありやしやと、おほつかなきまでたどるに、

と、霞の立ち込める海上を船で西下する。この「わが友舟もありやしやと」も、やはり「勢語」第九段の、都鳥を見て詠じた、

名にし負はばいざ事とはむ宮こ鳥わが思ふ人はありやしやと

を念頭にしているだろう。「勢語」の方は、自分の思い人の健在か否かを尋ねているが、「道の記」では、霞の中に姿が見えなくなつた親友の乗る舟の存否を気遣っている。ともに親しい者の存否を思う、不安な心情を抱いている点で共通する。

さらに勝俊は、この後、日暮れになつたので、

ある浦に舟を寄せて、今夜は月の出潮に、湊漕ぎ出でむと糺ひしけるほどに、自らは浜に上りて、清き磯間にたたずみければ、ほど近く海士の漁りする火見えたり。さてはあのわたりや、浦人の里ならんと尋ねまかりけるに、家もはかばかしき柱は立てて作らず。



と、海士人の貧窮生活を驚きをもって観察する。

この、海士の焚く漁り火から、浦人の里を思いやる傍線部の発想は、「勢語」で、男が津の国の蘆屋の里に出かけた第八十七段の、  
帰りくる道とほくて、うせにし宮内卿もちよしが家の前来るに、日暮れぬ。やどりの方を見やれば、海人の漁火多く見ゆるに、かのあ  
るじのをとこよむ、

晴る、夜の星か河辺の蛍かもわが住むかたの海人のたく火か  
とよみて、家にかへりきぬ。

の場面を想起させる。この推測はやや強引と思われるかもしれないが、これまで辿ってきた「道の記」における「勢語」の頻繁な享受や、この章段の享受が、先に触れた「広さ五丈許なる石のおもて」にも見出されたことを考慮すると、この場面を重ねていた可能性はあるだろう。

さて「道の記」の最後は、名護屋に到着して郭公の一声を聞き、一首の和歌を詠じ、「なれも帰らんにはしかじと鳴けばなるべし」と、郭公に感情移入して帰郷の思いを述べた後、「故郷の便り求めて、かくなん言ひ遣はしける」と、故郷へ贈った長歌で締め括られている。この長歌にも「勢語」の摂取があるので、それに触れて結びとしたい。この長歌は、勅撰集などの古歌を引用しながら、長い旅路に衰えて涙に濡れ、故郷に残した幼い子供に逢いたい親心を連綿と詠みついでいる。その中に、

今日手を折りて 数ふれば 己が故郷 立ち出でし 日数のほども  
今のはや 十とて六に なりにけり

と、長い旅の日数を嘆くところがある。ここも「勢語」第十六段の、紀有常が長年連れ添った妻と別れるときの、  
手を折りてあひ見し事をかぞふればとをいひつ、四つは経にけりの歌をアレンジして摂取している。この章段は、「道の記」の冒頭部の「あるは涙の降る」と同じ段であり、首尾対応させて、郷愁を一貫させているのである。

因みに勝俊は、正月十五日に京を出発、播磨の国で二十日ほど滞在したあと、二月十日前後に出発して、名護屋に四月上旬に到着しているので、「十とて六」≡六十日からみて、故郷とは播磨国の龍野を念頭にしていることになる。

さらに長歌の末尾は、  
なほもみまくの ほしかるは まだ二葉なる 撫子の 花の上なる  
夕露の 思ひ置くにも いとどしく 心の闇の 晴れやらぬかな  
と、幼い子供に逢いたい心情を吐露して結ばれる。ここも「勢語」第八十四段で、長岡に住む老母が男に詠んでよこした、

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよく見まくほしき君かな  
を想起させる。「勢語」の、老母が我が息子に逢いたい思いと、青年勝俊の、我が子に逢いたい切実な思いとを重ねさせている。そして、最後、長歌の反歌は、

分れつつ幾年経とも命だにあらば再び帰らざらめや  
と、「道の記」に流露していた、肉親や親しい人達のいる故郷への熱烈な帰郷願望を表面化させて結ばれる。

「九州の道の記」は、『長嘯子全集』で十二頁ほどの短い紀行文である。そこには、すでに屢述してきたように、「伊勢物語」を念頭にした表現が頻出し、私の気付いた範囲でも、十一、二箇所のにぼる。その「勢語」の摂取の手法も、単なる術学的な享受に終らず、「道の記」を一貫して流露する、故郷の肉親達への再会願望、郷愁の心情を一段と豊潤にさせるように企図されている。

「勢語」の東下りの諸段は、都に「ありわび」「住み憂く」なった男が、身をえうなき物に思ひなして、「東国に住むべき国を求めて行った漂泊の旅ではあるが、その心の裡には、都への郷愁が常に揺曳していた。その心情が、海辺の浪、浅間の嶽の煙、杜若、宇津の山、都鳥といった、旅先で目に触れるものを見て、今更のように横溢し、詠歌

の契機をなしていた。

「道の記」での青年勝俊も、生命の安全の保障もない戦陣に向かわねばならない状況にあり、後髪を引かれる思いで旅立っている。それは、「勢語」の男の、いささか感傷めいた郷愁より、もつと切実で厳しいものであったはずである。

勝俊は、その帰郷への願望を「勢語」撰取でもって、一段と深切なものにさせているが、そこで享受の対象とされた「勢語」が、単に東下りの章段だけでなく、恋人との別れを扱った、第二段や第四段、夫婦の別離の第十六段など、別離を主情とする章段を意図的に選び出し、しかも西国下向に援用している点が、看過できない特色である。

このような「勢語」の享受を通して、勝俊は、声高に表現してはいないが、戦陣に参加せねばならない宿命をかかえている武士の悲しみも底流させている。こういった資質が後に、都の郊外に隠棲生活をおくる彼の運命とも、どこか遠くで連なっているように思われる。

### 〔注〕

- (1) 「九州の道の記」は「孝白集」を底本として翻刻した、吉田幸一編『長嘯子全集 第二巻』に依拠する。
- (2) 『長嘯子新集』（中巻）所収の「木下長嘯子年譜」（津田修造・吉田幸一）によると、赤間神皇所藏「懷古詩歌帳」には、天正十五年三月二十六日に、秀吉が阿弥陀寺で催行した、安徳天皇御追福懷古和歌資料が収められており、そこに勝俊の歌も見えるという。
- (3) 『百代の過客 日記にみる日本人』。
- (4) 『文学』（昭和五十年十月）。
- (5) 以下の長嘯子の作品は、注(1)に示した『長嘯子全集』に依拠し、私に濁点を付して本文を引用した。
- (6) 以下に引用する「九州の道の記」の本文は、注(1)の翻刻をもとに、適宜、私に漢字宛や濁点などを付して校訂したものによる。

(7) 『新編国歌大観』に依拠。以下、特記しない和歌の引用は、すべて同書による。

(8) 「伊勢物語」の本文は、日本古典文学大系による。ただし、歴史的仮名遣いに正し、送り仮名の（ ）もはずした。

(9) 注(4)の嶋中論文の引用。

(10) 「伊勢物語」では、第八十七段にも「むかし、をとこ、津の国、むはらの郡、蘆屋の里にしろよしして、いきて住みけり」とみえる。

(11) 「九州の道の記」の「遙かなる沖に浮かぶ舟も、鷗・千鳥などのやうに小さく見えて、よそめばかりやといへる、さることぞかし」の傍線部分は、「秋篠月清集」の海路五首のうちの「かもめうかぶなみちはるかにこぎいでぬよそめばかりやおきのとも舟」による。この事実は、勝俊が良経の海路五首をよく記憶していたことを示している。してみると、五文ばかりの石面に良経の和歌を記したのは、勝俊自身であった可能性もある。

(12) 拙稿「人が馬から下りるときー『伊勢物語』の世界ー」（国語と国文学、昭和五十三年八月）参照。

### 〔付記〕

なお、本論考では、木下勝俊の妻子など肉親についての具体的な言及は行わなかったが、最近刊行された『長嘯子新集』（三巻）（吉田幸一・津田修造編）には、勝俊の出自・子女・婿などに関する詳細な論考が収められていることを付記しておく。

（平成五年十一月五日受理）